

俞鎮午「新京」における空間の政治学

著者	柳 水晶
雑誌名	文学研究論集
号	27
ページ	83-99
発行年	2009-02-28
その他のタイトル	Reading Yu Jino's "Singyong" from Geopolitical View
URL	http://hdl.handle.net/2241/103409

兪鎮午「新京」における空間の政治学

柳 水晶

1. はじめに

1942年11月3日、東京帝国劇場に日本、朝鮮、台湾、「満洲国」、「蒙古」、中華民国を「代表」する文学者77名が集まって、第1回大東亜文学者大会の開会式が開かれた。その朝鮮代表5人のうち、2人は「内地」に出自をもち、朝鮮の文壇で活動していた者で、3人は朝鮮に出自をもつ者である。その3人の朝鮮人の中に兪鎮午がいた。すでに朝鮮文人協会発起人、国民総力朝鮮聯盟文化部委員など朝鮮文壇を代表して戦争と帝国国策に協力していた兪の存在は大きい。大東亜文学者大会参加を目前にして彼が発表した小説に「新京」という作品がある。「新京」は周知のとおり、1932年「満洲国」の首都と定められた長春のことで、1935年には「新京」と名づけられた。兪鎮午は、そのまま「新京」というタイトルで「京城」の某大学に在職中の主人公が「新京」に出張に行った物語を『春秋』第3巻第10号〔1942年10月〕に韓国語で発表した。発刊は正式に「大東亜会議」で「大東亜共同宣言」がなされる前ではあったが、1938年11月3日、近衛文麿総理の声明により始まった「新体制運動」と「東亜新秩序」の渦中であった。この外部のコンテキストを考慮する場合、目前に迫った「大東亜共栄圏」の「新しい」「京」、「新京」を、植民地朝鮮の知識人がこの時期に書いた小説の題目・舞台・題材とし、さらになお、「国語」ではなく、韓国語で創作を行ったことは意味深いことだろう²。

近年蓄積された植民地都市をめぐる研究では、植民地政策にともなって近代都市として再編された都市空間の問題には文学的、地理学的、建築学的、社会的、歴史学的領域から様々なアプローチがなされている。本稿はこのような植民地都市に関する先行研究を参考にして、兪鎮午「新京」における空間の問題を地政学的に解釈する試みである。テキスト「新京」において都市「新京」を見つめる朝鮮知識人のまなざしを通して提示される、都市計画と建築様式の様子を読み取り、そこから、1942年において、「新京」の地政学的な意味を明らかにし、作家兪鎮午はその「意味」をどのように描き、受け止めていたかを考察する。

2. 朝鮮から「満洲」へ——移動する者のまなざし

(1) 「新京」概観

具体的な分析に入る前に小説「新京」の概要をみてみよう。

「京城」のある大学に在職中の哲^{チェル}は卒業予定者の就職活動を支援するために「満洲」の「新京」に向かう。途中、病床の親友郁^{ユク}に会いに平壤に立ち寄るが、郁はすでに昏睡状態

であった。「新京」に着いた哲は、12年前に行ったことのある長春とは打って変わった「新京」の姿に驚きつつ、自分の学生のための就職活動に行く先々で朝鮮人に対する差別と自分への冷たい態度にぶつかる。その上、故国から郁の死亡を知らせる電報まで届き、哲は失意と憂鬱に陥った。しかし、偶然「新京」の街で、13年前、大学の研究員時代に恋慕していた女性三珠と再会する。2人の語らひは、郁、三珠と3人で過ごした楽しかった時が思い出されるもので、哲の気分は晴れる。哲は、夭折した友を考えると胸が痛むが、長く生きることの大事さを思い、生きていること、それだけに幸せと感謝を覚えるという場面で小説は終わる。

(2) 朝鮮から「満洲」への出張

小説は哲という人物が「新京」行きの列車に乗っている場面から始まる。ここで、哲の「満洲」出張にまつわる諸事情を整理してみよう。

今度、学校で卒業生の就職斡旋のために満洲へ出張に行けという話が出たときは、辞退しようと思えば辞退できなくもなかったが、快くその任務を受け入れたことも事実で、満洲に行くついでに郁に会って、一晩きれいな話でしようと思ったことと、もう一つ、新しい満洲に対する好奇心もあったからだ。[p.189]

上の引用から哲が「新京」に向かう理由は三つに整理できる。①卒業生の就職斡旋のための「満洲」出張、②郁に会うため、③「新しい満洲」に対する好奇心がそれである。

そこでまず、理由①の背景をテキストから見てみよう。

卒業する学生たちの就職がかかった仕事を自分の手で充分にできるのかと自ら疑うくらいだった。それも人手を求める需要が卒業生の数より多ければ、別段大変でもなかっただろう。しかし不幸にも、哲の学校の場合は採用する求人の数よりは卒業生の数の方がはるかに多かった。[p.193]

植民地朝鮮では1930年代に入ってから、専門学校の卒業生や海外留学生たちが学業を終えて大量に社会に進出するが、世界恐慌の余波で職を得るケースは少なく、大多数は街を彷徨う失業者に転落するか、「満洲」や間島へと流浪することすらあった³。そこで、1930年代の韓国小説には「ロンペン」すなわちインテリだが、一定の職業を持たず、退嬰的で怠惰な思考を抱えて日々を過ごすだけの「高等失業者」を登場人物とするものが異様なほど多い⁴。これは、一つは植民地状況がもたらした、技術職の植民者日本人による占有という事態から生じる。「1939年頃、朝鮮で働いていた全技術者のうち90%が日本人で、その多くは日本で教育を受けた人たちであった」⁵。しかし、日中戦争の長期化と太平洋戦争の

勃発により、朝鮮総督府は技術者・技能者の政策を変えるしかなかった。それというのも重化学工業と軍需工業は発達していくのに反して、日本人技術労働者の一部は戦争に徴集されるなどし、労働力の需給にアンバランスが生じたからである。その結果がどうなったかといえば、「朝鮮人技術者は1942~1944年の間、1215名から1632名に増加した。だが、1942年の調査によると、工業部分で朝鮮人は技術者の18.1%、労務者の92.9%を占めていた」⁶となっている。この調査から、この時期にも「上位職は日本人、下位職は朝鮮人」といった朝鮮の植民地的な雇用構造に大きな変化はなかったことが分かる。上の引用で「卒業する学生たちの就職」口を探すために「満洲」へ向かう哲の出張の背景には、既述のような朝鮮の事情がある。つまり、植民地的な構造による職業格差という暗鬱な現実を背負って、哲は「新京」へ行くのである。

哲の「新京」行きの理由その②は、病床の親友、郁に会うためである。平壤の病院で、すでに昏睡状態に陥っている郁は、ようやく哲が見舞いに訪れた時、ほんの一瞬ながら意識を取り戻した。それほど二人の関係は特別なものであった。彼らの二人の関係が、ただの友達以上のものであったことは、次の引用から分かる。

今、郁を失うことは朝鮮の文学のために二度と得られない高貴な古玩品を失うことに違いない。いや、それよりも哲は一人の友を失うことが悲しかった。苦しさで悲しさを分かち合い、お互いの長所と短所を知り尽くしながらも、お互いの価値を尊重してくれた友。いや、荒波の時代と一緒にくぐり抜けながら、様々な苦難を共に味わった友——そんな五本の指に入る友の一人を哲は今失うことになった。
[pp.188-89]

郁は哲にとっては親友であり、「文学」であり、戦友であり、青春であったのだ。哲が「文学」に対する愛着、「文学」こそが「真実」で「人生」であるという信念をもつ人物であることを考えれば、「一晩きれいな話でしよう」と思った当初の期待が何を意味し、郁の死にゆく瞬間に立ち会う辛さがどれほど大きかったかが推察できよう。そして、果たされなかった願いは、哲の「新京」行きをさらに暗いものにするのである。

それに対し、哲が「新京」に行く理由その③に当たる「新しい満洲」に対する好奇心は、希望に満ちているようにも見える。

奉天までは何度も行ったことがあるが、哲が新京に足を運ぶのは二回目だった。そのうへ最初の訪問はもう十二年も前、満洲事変がまだ起こる以前のことであるため、哲は新京に近づくにつれて次第に好奇心で心が緊張しだした。十余年という歳月が過ぎたことよりも事変という大きな事実の容貌を新京で確かめたかった。もちろん哲は事変後十数年の間、新京が長春時代の面影をひとつも残さず、立派な近代都市になったことを文章や話で充分聞いたりみたりしていた。しかし、それにもかかわらず、実

際にみる新京への彼の好奇心は相変わらず強かった。〔p.188、下線は引用者による。
以下同様〕

哲は「事変という大きな事実の顔」を「立派な近代都市」「新京」で確認しようとしている。ここでいう「事変という大きな事実の顔」というまでもなく「満洲国」のことであり、「文章や話で十分聞いたりみたりし」た「立派な近代都市」はそこに実現されつつある「新しい」「近代」であろう。では、実際、哲が「新京」で見た「満洲国」と「新しい」「近代」はどのようなものであったか。次の節ではそれについて考察する。

3. 表現する空間、「新京」の表象

(1) 「国都建設計画」における「旧」と「新」の競合

この小説において「新京」の描写は、汽車に乗って「新京」に近づきながら、その風景を見ての回想から始まっている。

もし哲が初めて新京に足を踏み入れる人だったら、その光景がそれほど不思議ではなかったかもしれない。しかし、哲は十二年前の長春時代の新京を知っていた。その時の長春は駅だけが大きい、みすばらしく侘しい地方都市に過ぎなかった。南満洲鉄道の終点であると同時に、中東鉄道の終点でもあったため、日本とロシアと張学良といった三つの勢力がぶつかり合う地点だったので、駅には鎌と金槌がクロスした帽章を付けた中東鉄道の社員とピストルを持った張学良の憲兵と満鉄社員とがそれぞれ肩を張って雑然と行き来していて、雰囲気はひどくおぞましいものがあったが、駅から一步出ると平べったい家々が虚しいほど大きかった都市計画の失敗を物語っていて、広い広場には雑草がかなり茂っていた。すぐシベリア本線と連絡するという「インターナショナル・ワゴン」の寝台列車がここまで届いていて、その車両に乗って一步北へ進むと駅毎に早くもソ連の赤い旗がなびいていて――。

その時の長春と今の新京との対照。張学良の憲兵も中東鉄道の社員も跡形も残っていない新京駅。それだけでも哲の新京に対する好奇心は満たされたといえる。〔p.190〕

「満洲国」建国前、そして満洲事変が起こる以前の「新京」、つまり長春は「駅だけが大きい、みすばらしく侘しい地方都市」ではあったが、「日本とロシアと張学良といった三つの勢力がぶつかり合う地点」であったと哲は回想する。また、それに続いて、中東鉄道の「インターナショナル・ワゴン」に乗って、北進するときの窓外風景を通し、ソ連と繋がる連結部としての長春を思い出し、「張学良の憲兵も中東鉄道の社員も」見られない「今の新京」を対比させる。この引用からすると、「今の新京」では「インターナショナル」な連

結はとうてい無理なことになり、「張学良の憲兵」と「中東鉄道の社員」が去っていった後、「新京」に残っているのは「日本」だけだということになる。やや単純ないい方をすれば、「新京」の風景を見た哲が、アジアで勝利していく日本帝国を「満洲」の「歴史」に重ね合わせて回想しているとも捉えられる。「旧い」ものは去って行き、「新しい」秩序が支配する空間としての「新京」である。この哲の「満洲」の歴史認識は、この小説の枠組みと主題を規制する。その点からも留意すべきであろう。

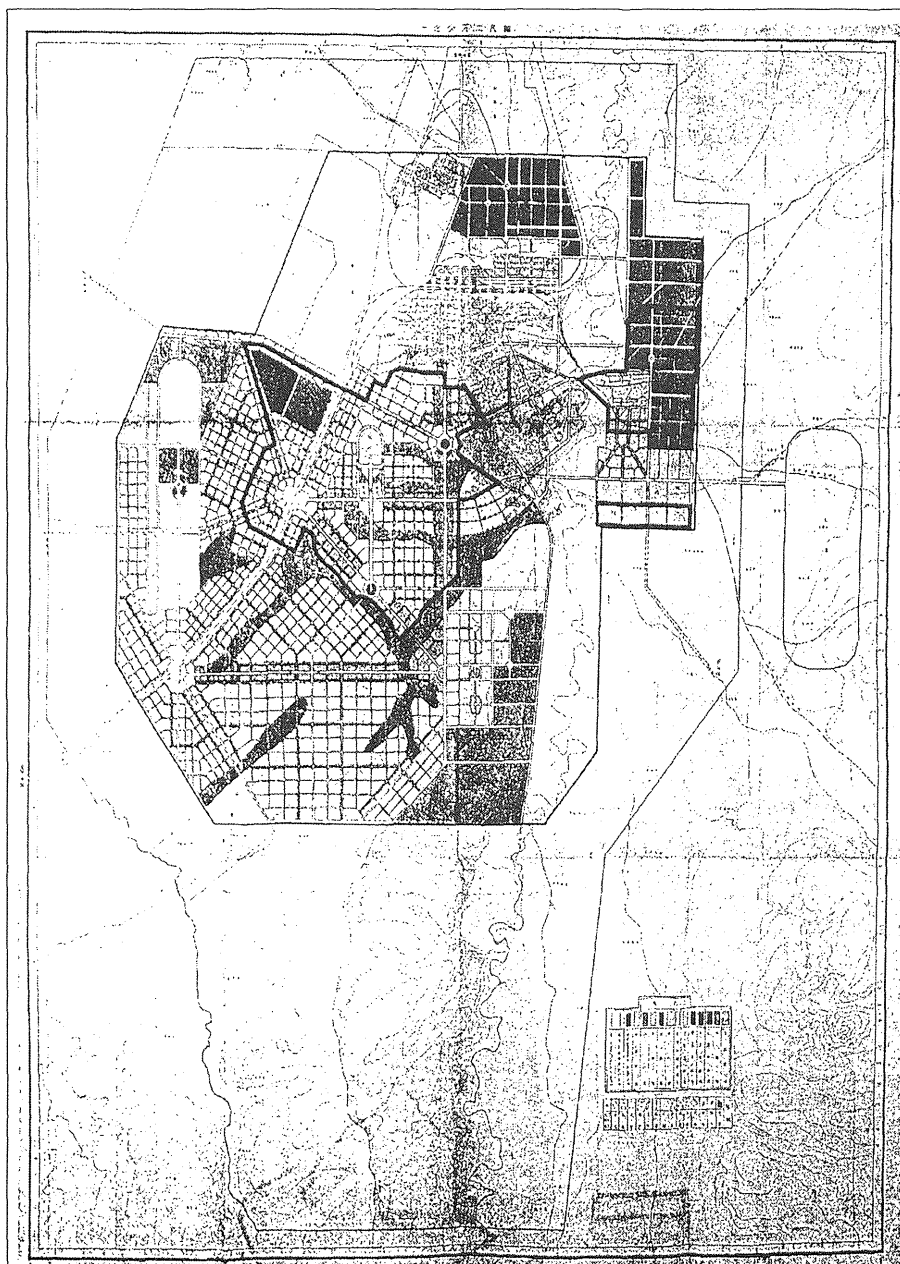
それでは、哲が実際にしたであろう「新京」が、現実ではどのようなものであって、また、当時の「新京」にはどのような背景があったのか、資料をとおして確認しておこう。西澤泰彦によると、

満洲事変が起きた時、長春には四つの市街地があった。いちばん南に位置していた長春城、いちばん北に位置していた東支鉄道（東清鉄道の清朝滅亡後の日本名）の鉄道附属地、その間に満鉄の鉄道附属地と、一九〇五年に清国が設定した商埠地、の四つである。⁷

とある。この資料から「満洲国」以前の長春には中国の勢力区域が二つ、日本とロシアの勢力区域が一つずつだったことが分かる。しかも、満洲事変当時、すでに長春では満鉄附属地、商埠地、長春城が一体となって一つの都市を形成しつつあったが、関東軍司令部が「満洲国」政府に立案させた首都建設計画はそれを無視し、「満鉄鉄道附属地だけを利用しながら、バロック的都市計画に中国の伝統的な都市計画手法を組み合わせ、満洲国を飾ろうとするもの」⁸であった。1932年公表された国都建設計画の全容が【図1】である。【図1】の国都建設計画図の真ん中を縦に走る道路が大同大街で、その北端が新京駅である。満鉄鉄道附属地から延びる大同大街の途中には外周1キロにも及ぶ巨大な大同広場があり、そこからまた放射線状に道路が延びていて、いかにも大同大街が「新京」の中心通りであることが分かる。

それに比べて、大同広場の東側に位置する長春城と、長春城と新京駅の間の商埠地は、そこから拡大する都市計画もなく、新しい開発もないことが一目瞭然である。それによって、既存の中国勢力は封じ込められる形になっている。いわば、長春は消滅し、「新京」が「新しい」秩序を展開していくことがこの計画図から読み取れる。

また、大同広場の西側に位置する逆U字型の空間は新宮殿の建設予定地で、そこから大同大街に並行して南に延びる道路が順天大街であるが、順天大街には官衙の建物が両側に並ぶことになる。この新宮殿と官衙建築の構図は、「皇帝とその前に居る文武百官のごとき姿を演出できるはずであり、それは満洲国政府が求めた「王道楽土」の都市空間を演出する最大最良の機会であった」⁹と西澤は指摘している。



【図1】「満洲国」による「国都建設計画」〔1933年〕¹⁰

しかし、国都建設計画図を見ても分かるとおり、ヤマトホテル、関東軍司令部、三菱康徳会館、首都警察廳、中央銀行、電信電話会社、国都建設局、関東局などが並ぶ大同大街に比べると、官衙街の順天大街は明らかに短く、都市の中心軸にはなれない、いわば真ん中に隔離された空間に見える。それに、長春城と新宮殿・官衙を遮断する形で大同大街が走っているのも興味深い。いつか定着するだろう「新京」の「新しい」秩序が安定するまでは中国または中国人の勢力を封じ込めようとする狙いがあったとも考えられる。このような「封じ込め」は国都建設計画図にだけあったわけではない。「満洲国」の首都を決める段階から、張作霖・張学良政権の崩壊後も多数の中国東北軍閥の有力者が残っていることを理由に奉天〔現在の瀋陽〕は首都候補から外されたことが、長春が「新京」になったことの重要な要因であったことは先行研究¹¹でたびたび指摘されている。

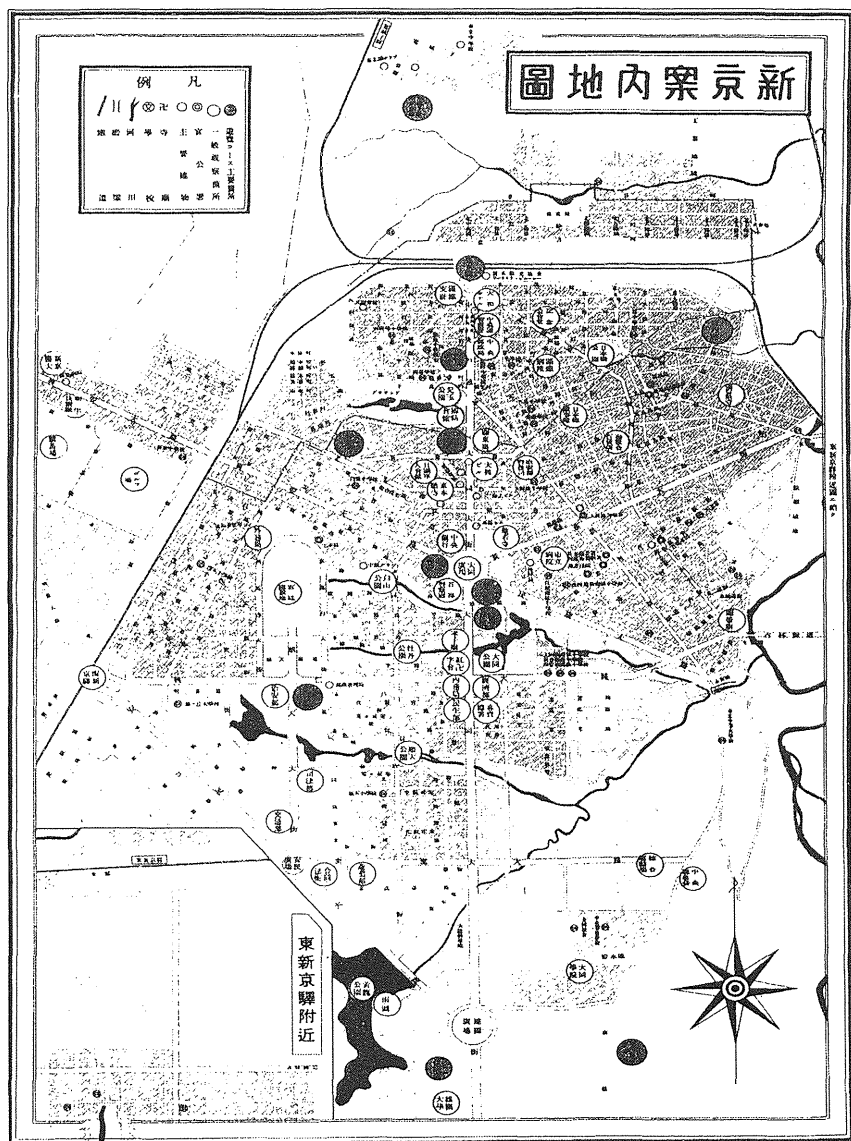
テキストに戻って考えてみると、哲が回想する長春と目の前に見える「新京」が対照され、長春時代の「張学良の憲兵」と「中東鉄道の社員」が姿を消して、「日本」だけが残った「新京」は、まさに「満洲国」の「国都建設計画」の「成果」であったのである。〔1939年の時点ですでに、「新京」の主要施設は大同大街に集中していた。【図2】参照〕その「成果」を確認した哲の心境を、語り手は「それだけでも哲の新京に対する好奇心は満たされたといえる」と語る。「それだけでも」、つまり「張学良の憲兵も中東鉄道の社員も跡形も残っていない新京駅」を見ただけで、哲の「新京」出張は満足のいくものであったのである。前述したように、「張学良の憲兵も中東鉄道の社員も跡形も残っていない新京駅」とは、アジアで勝利していく日本帝国と「古い」ものは去って行き、「新しい」秩序が支配する空間を同時に意味し、「新しい」秩序は日本帝国が支配することの暗示として機能していると読み取れる。哲は、その暗示された動向を「新京」に行く前にすでに予想し、期待していて、また「新京」に着いて真先にその根拠を探して確認したのである。

新京駅に着いてすぐ、このような都市景観の変化を敏感に察知した哲は、駅からホテルに向かいながら、12年前に立ち寄ったことのあるロシア式キャバレー¹²「カフェー・インペリアル」¹³を通り過ぎる。それ自体は昔の像のままである「カフェー・インペリアル」が哲に与える印象はまるで違うものであった。次の引用からその様子を見てみよう。

だが、何故こんなにみずばらしいのだろう。通りの左右にずらりと並んだ高いビルの堂々たる風格と豪華な装飾と最新の設備に比べて、カフェー・インペリアルはその平たい背や黄ばんだ色など隅々が、まるで無理やりソウルのど真ん中に連れ出された田舎者のようだった。

「ふうん」

哲は改めて今までの変化の激しさをしみじみと感じた。歴史は変わる。その変わる歴史を——ここまで考えたが、ふと周りを見ると気持ちよく舗道を歩く洋装の若い女性たちはほとんど全て、素足に靴を履いたその時のナターシャの格好だった。ソウルの街でも眩しいくらいに見えた女性たちのこの風俗から今さらながら歴史を感じた。



「カフェー・インペリアル」が違って見える理由は「通りの左右にずらりと並んだ高いビルの堂々たる風格と豪華な装飾と最新の設備」との対比からである。「堂々」と「豪華」になった「最新」の「新京」に比べたら、長春の名残は「みすばらしい」ものに過ぎない。その「最新」の「新京」への変化を見て哲は「歴史は変わる」という感慨を覚える。長春は「新京」に変わって、「歴史」は変わるのである。

しかし、中国、ロシア、日本の勢力がせめぎあいをしていく空間から、日本帝国が主導する「満洲国」の空間への変化を「歴史」として認識し出した時点で哲が一旦思考を止めるのを、語り手が注意深く述べていることに注目しておきたい。その後に続くのは哲のまなざしの移動で、「新京」の街を歩く女性たちの格好に目を移す。そして、彼女たちの格好の変化とソウルの女性たちの風俗の変化に改めて気づいた哲は、そこにもまた「今さら」「歴史」を感じるのである。いつの間にか、12年前、「カフェー・インペリアル」で出会ったナターシャの格好のように「西洋化」した「ソウル」の女性たちの格好を想起し、女性たちが素足を出さなかった以前より「近代化」した近代都市「ソウル」の姿を発見する。またそれを近代都市「新京」に来て「今さら」気づき、「今さら」「歴史」を感じるというのである。しかし、語り手は、長春が「新京」に変わった変化に「ソウル」の風俗の変化を重ね書きしたところで、あえて哲の認識を止めさせている。語り手は「旧」が「新」になり、「歴史は変わる」と認めてはいるが、「その変る歴史を——」で判断を停止させる。哲の思考は宙吊りにされた状態に置かれ、「歴史」に対する判断を留保する、または、一応出されたかも知れない判断を示すことを躊躇するのである。

それでは、果たして、判断が留保された「歴史」とはどのようなものなのか、「新京」の「新しい」姿とはどのようなものだったのか、テキスト「新京」のなかからさらに詳しく検討してみよう。

(2)「新京」官衙建築の様式とイデオロギー性

当時、急行列車「ひかり」は朝鮮の釜山と「新京」の間を走っていた。列車は「新京」の南西方向から南新京駅を過ぎて、新京駅に着いた。新京駅に近づく列車の中から哲が眺める「新京」は、哲の視線に沿って以下のように描写されている。

その期待していた新京は、さすが哲の予想を裏切りはしなかった。南新京付近から平野部のあちこちにはすでにマンモスのような巨大な建築物がぼつんぼつと見え始め、間もなくして雄大な近代都市が眼前に広がった。まだ建設中といった印象もあるが、芽を出したばかりの黄緑の楊柳の間には綺麗なコンクリートの住宅が敷かれ、遠くに見える大きい建物の東洋的な屋根も目に新しかった。——この建物の新しい様式も東洋が西洋の影響から抜け出て、自分のものを創造しようとする努力のひとつの

現われなのかと哲は考えた。〔p.190〕

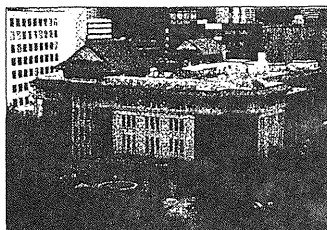
哲が見たのは「マンモスのような巨大な建築物」、「綺麗なコンクリートの住宅」、「遠くに見える大きい建物の東洋的な屋根」がある「まだ建設中」の「雄大な近代都市」である。実際の列車の進行方向からすると遠方に見える「新京」というのは、ただ広い平野にいきなり聳える「満洲国」の官衙建築、既述した順天大街の官衙街である。上の引用で目を引く箇所は「遠くに見える大きい建物の東洋的な屋根」についての哲の感想であろう。確かに今の長春を訪ねても、「満洲国」時代の建物の規模と形は目立つものである。ましてや1940年代、まだ摩天楼も高層マンション団地もなかった時代だと、その光景は見る人を圧倒するものであったろう。しかし、哲はその光景に漠然と圧倒されていたわけではない。彼が目にしたのはその「新しい」建築様式であった。西洋建築の躯体に東洋風の屋根を載せた建物、それは、日本の建築用語でいうと帝冠様式というものである。『建築大辞典』¹⁵で確認してみよう。

昭和初期ナショナリズムの台頭を背景として、無国籍または国際的な様式の近代主義建築に対抗して主張された様式。構造は鉄筋コンクリート造または鉄骨造で、これに伝統的な屋根を載せるのを最大の特色とする。日本風及び東洋風と称しながら実際には中国風の色彩が強い外観をもつ。一般的にはナショナリズムとファシズムが高揚した1930~40年ごろのもののみを指す。〔後略〕

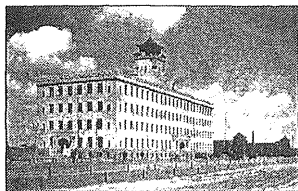
哲が見た帝冠様式の建物は、上の辞典の説明を見ると、日本のナショナリズムの台頭を背景に、「西洋」のモダニズム建築に対抗する形で考案された様式であることが分かる。日本で発生した帝冠様式は、日本本土のほか、朝鮮、台湾、「満洲」など日本の植民地でも用いられたが、その代表的な建築物を見てみると【図3~7】のようなものがある。



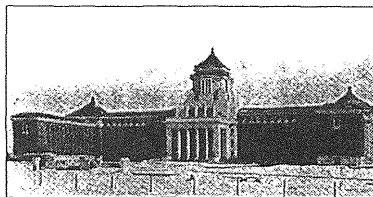
【図3】神奈川県庁〔1928年竣工〕¹⁶



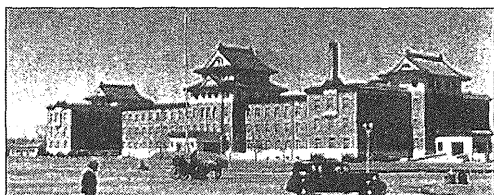
【図4】軍人会館〔1934年竣工、現九段会館〕¹⁷



【図 5】三菱康徳会館（1936 年竣工）¹⁸



【図 6】満洲国国务院庁舎（1936 年竣工）¹⁹



【図 7】関東軍司令部（1934 年竣工）²⁰

帝冠様式が日本「内地」以外のところで用いられたときには興亜様式ともいわれた。この独特な建築様式は、「興亜」という名称からも分かるように、日本のナショナリズムの一方でもあったアジア主義とも関わっていたのである。主に技術的、工学的な領域に属するかのように見える建築様式が、実は様々な思想や政治性と結託され、無形のものを有形のものに表現する手段であったことである。それは無論、日本に限ることではなく、上海の旧共同租界の外灘を見ても分かるように、列強は建築を通して独自の対外植民地政策を表現したのである。「新京」は、「巨大な記念碑的建造物」²¹でその権力と正当性が誇示された空間として、「満洲国」の首都の役割をも担わされていた。新京の建物には機能性以上に記号性が求められていたのである。その「新京」の巨大な官衙建築の建築様式を見ると、体は西洋、頭は東洋という「和魂洋才」の表現に見える一方、西洋の上に乗っかっている東洋という「近代の超克」の表現にも見える。

（3）「近代の超克」と「東亜新秩序」の空間を描くこと、自己表象すること

日本のナショナリズムやファシズムは、大亜細亜主義、アジア主義をも吸収していた上で、発展した形で「大東亜共栄圏」の構想であった。日本帝国において「満洲国」が単なる植民地ではなく、18、19 世紀型のヨーロッパ式植民地とは一線を画すものと認識されることは重要である。日本が遅れた帝国主義として海外膨張するにあたって、西欧列強のいわば古典的な植民地統治では、その限界や矛盾を学んでいたし、それでも古い統治を強行すれば、非難を蒙らざるを得なかったであろう。それゆえ、朝鮮では「同祖論」に基づいた「日韓併合」と「皇民化」政策をとり、中国大陆では傀儡政権「満洲国」を建て、「五

族協和」「日満一体」を掲げた間接支配を行ったのである。「満洲国」はいわば帝国主義の進化した形であったのである。

アジア主義は、当初は日本と中国、朝鮮の関係論から始まり、日露戦争以降、アジアの革命勢力を支援する思想に発展し、日中戦争の情勢変化とともに、やがて日本を盟主としたアジアの新秩序構築、すなわち「東亜新秩序」に展開していく。そして、それはやがて大東亜共栄圏構想へと、より露骨な大陸拡張主義へとつながっていくのであるが、当時、アジア全域での日本軍の「勝利」は、一部の人には、その発展していくアジア主義に十分な説得力を与えていたように見える。

「大東亜共栄圏」の提唱以前、「東亜新秩序」の具体的な実現形態として、近衛文麿のブレーンの集団である昭和研究会が提起した「東亜協同体」があったのは周知の通りであろう。その昭和研究会のメンバーで中国研究家であった尾崎秀実の『「東亜協同体」の理念とその成立の客観的基礎』²²という文章を一部抜粋してみよう。

東亜協同体論の成立の基礎の一つが、以上のごとく日本の一方的方式によって東亜諸国を経済的に組織化することが困難なりと事実が明確となつた結果にあつたことは事実である。かかる意味からいふならば、「東亜協同体」論の発生をもつとも深く原因づけてゐるものは、支那における民族の問題を再認識したところにあると思はれるのである。

支那における民族の問題は、何人もこれが現代支那において最大なる問題たることを認めるであらうが、しかしながら、あたかもあまりに身近く存在し、しかもあまりに広大なるものが看過されがちであるごとく、支那における民族の問題はしばしば支那に対する問題の場合に忘れられがちのやうに見うけられるのである。〔中略〕かかる協同体の確立は必ずやその指導的構成員たる日本に対しても、他の構成員たる東亜の国々とともに、多大の利益をもたらすことになるであらう。

尾崎は上の文章で、日中戦争の長期化のなか、日本が拡張主義的な征服ではなく、中国の自発的な協力が得られる方向へと転換しなければならないと力説している。その理由としてあげているのは、中国の民族意識と反日抗戦が日本側の予想以上に激しく、根強く展開されるはずであろうというもので、中国研究家ならではの判断である。「協同体の確立」に日本とアジアが生き延びる道があるということは、昭和研究会メンバーの同意の下で、実際 1938 年 11 月 3 日に行われた近衛声明の大きな骨子でもあった。「東亜協同体」論者たちは、石原莞爾を初めとする「東亜連盟」論者たちとも一線を画す人たちで、「当時の日本の中国侵略政策に何がしか荷担していたことは否定できない。しかし、同時にそのような状況のなかで、侵略政策と軍事侵攻を阻止できないまでも、少しでも可能なかぎり軌道修正を行い、戦争による被害を少なくしようと努力した人たち」²³としての評価もある。これは、「武漢陥落」を「新事態」として認識し、「東亜協同体」を「日支事変の進行過程

の生んだ歴史的産物」、必然的に来るべき未来の姿として提唱される学的研究が、なんらかの説得力をもって展開されていたことになる。

「東亜協同体」に関連して、『三千里』1940年7月号に、兪鎮午は「所感」という短い文章を残している。

今にして思へば、この三年の間に、事変は当初私などの想像も出来なかつた雄大なる規模に発展したものである。そして事変は今や単なる蒋政権の打倒といふやうな消極的なものでなく、東亜新秩序の建設といふ積極的なものを目標とするものになった。

事変が単に消極的なものであり、軍事的なものに限られてゐる間は、私たち文化人はたゞ一国民として時局に協力し得るに過ぎなかつた。が、かやうに積極的なものにまで発展して来ると、私たちは単に一国民としてばかりでなく、実に文化人としての責務をも併せ負担するやうになったことを考へねばならない。蓋して東亜新秩序の建設は、また東亜新文化の建設でもあるからである。²⁴

ここでも日中戦争の長期化、特に1940年汪兆銘南京政府の成立以後の情勢の変化を意識していることが分かる。以前は、軍事的な侵略以外の何物でもなかった日中戦争にしかたなく「協力」するしかなかった立場から、「東亜新秩序の建設といふ積極的なものを目標とする」新しい意味を見出せる方向へと転換したことが認められる。この資料を見ただけでも、兪鎮午が尾崎を始めとする日本の一部の知識人たちが主張していた「東亜協同体」論に賛同していたことは確かであろう。アジアの戦場での日本の勝利、日本の力を背景にした汪兆銘政権の登場、日本と英米との本格的な戦争、「新京」の眩しい発展といった状況を目の当たりにした朝鮮の知識人が、「新京」を歴史の必然として提示された新しい「協同体」として、そこに未来像を描くのも無理もないだろう。

「東洋が西洋の影響から抜け出て、自分のものを創造しようとする努力のひとつの現われ」という哲の考えは、この帝冠様式に込められた「近代の超克」と「東亜新秩序」の意味を的確に捉えていたことになるだろう。しかし、西洋に対するアジアの解放とアジアに対する日本の支配という日本帝国のダブル・スタンダードは、「理想＝建前」と「現実＝本音」の間で実際様々な矛盾を胚胎していた。その矛盾はテキストのなかにも書き込まれている。それは、引用したテキストが「この建物の新しい様式も東洋が西洋の影響から抜け出て、自分のものを創造しようとする努力のひとつの現われなのかと哲は考えた」として締めくくられているところに見てとることができる。

これまで見てきた「新京」の都市計画・建築とその政治的意味は、作中人物としての哲のまなざしによるもので、語り手は慎重に自己を哲から切り離している。語り手は哲との間に距離をおくことによって、哲の矛盾を示唆しようとしているといえよう。主人公哲と語り手との間の距離が一番顕著に表れる個所は、次の引用であろう。

しかし、人のおかれた立場というのは恐ろしいもので、何年かその仕事をやっているうちに、哲も今ではその種の仕事に随分慣れ、大概のときには不快感を起こすこともほとんどなくなった。誰の前でなんのためらいもなく頭を下げることもできたし、理不尽な非難を受けても、ただハハッと笑ってあれこれの言い訳をしてごまかすこともできるようになった。たまに哲はこんなふうに変った自分を一種の墮落ではないかと振り返って考えるときもあった。もっと若かった時に哲が書いた文章で感じられた、弾くと切れそうな鋭い神経を考えたら、哲の今の神経はやはり一種の墮落でないとはいえなかった。しかし哲はそれを自分の成長だと自分に言い聞かせた。世間知らずが少しは世間というものを知った結果だろうと思った。どんな場合でも自己というものを失わずにいればいいのではないか。現実があるがまに見て、まずそれをそのまま受け入れるのは、自分がいつも夢見たより大きな学問を生み出すためにはむしろ必要な修練だろうとも思った。〔pp.193-94〕

哲の内面の記述と語り手の直接記述が交差・競合しながら、哲の変化を表す下線部の「一種の墮落」は、哲の立場では「それを自分の成長だと自分に言い聞かせた」という文章で「自分に言い聞かせ」という表現を使うことによって、自己欺瞞と抑圧がかえって確実なものとなる。そして、このように二つの叙述の間で、哲は自分の「一種の墮落」に対する合理化を試みている。注目すべきところは、語り手は直接記述ではなく、哲の内面を記述する方法を取っている点であろう。語り手が哲の内面描写を冷静に行うことによって、哲の内面と語り手の記述との間の距離、あるいは二重性をはっきりさせているのである。それによって、この合理化があくまでも哲の視点からの主観的な解釈であることを際立たせてしまっているのである。

以上の分析では、あえて語り手を主人公哲と切り離して説明した。しかし、テキスト「新京」の前の引用のような記述手法は、全く違う思考体系としての主人公と語り手ではなく、「哲」という一つの思考体系のなかで起こる内的葛藤、または自己合理化の過程でもある。このように見た場合は、ここでの語り手は哲のなかで自分を冷静に見つめる〈もう一人の自分〉として見ることもできる。

「若かった時」の「弾くと切れそうな鋭い神経」を失い、「誰の前でなんのためらいもなく頭を下げることもでき」、「理不尽な非難を受けても、ただハハッと笑ってあれこれの言い訳をしてごまかすこともできるようになった」自分を「より大きな学問を生むためにむしろ必要な修練」を受けているといいながらも、実はその「成長」は哲の主観的な思い込みかも知れないという冷やかな目で眺める〈もう一人の自分〉、または語り手がいるのである。このような哲／語り手＝〈もう一人の自分〉の交差・競合による自己反省と自己合理化、またそれに対する冷やかな視線は、主人公に密着した語り手ではなく、その間の距離を意識させるものとなる。

それに、どんなに「自分」が「現実を現実のままに見て、まずそれをそのまま受け入れ

る」「成長」をしたと断言しようとも、それを「一種の墮落」と見ている語り手＝くもう一人の自分」が厳然と存在するのである。もしテキスト「新京」のこの段階までの解釈を、このように読み取ることができるならば、ここでの哲の「東亜協同体」、「東亜新秩序」への賛同と、前に判断を中止させた「その変わる歴史を——」という叙述とが矛盾したまま重ねあわされることになる。哲に距離をおく語り手＝くもう一人の自分」は、歴史が「東亜協同体」から次の段階、つまり「大東亜共栄圏」へと向かう帝国主義の認識にも距離をおいて判断を中止せざるを得ないのである。主人公哲と語り手の両者を合わせた位置に作者がいる。

小説「新京」は兪鎮午が自分自身と周囲の人びとを小説の登場人物として描いた「モデル小説」²⁵、「自己表象テキスト」²⁶である。「〈表象〉という言葉を導入することによって、〈書かれる自己〉と〈書く自己〉、およびそのコンテクストとの関係を考察する道が開かれる」²⁷という日比嘉高の主張を踏まえるならば、「書かれる自己」哲と「書く自己」、つまり狭くいえば作中の語り手、広くいうと書き手作者は、すべて作家兪鎮午の「自己表象」としてテキストのなかに現われているのであろう。そしてそのテキストはまた、現実のコンテクストとの関係のなかで様々な変形と抑圧の過程を経て、存在し、表れてくるのである。テキスト「新京」は、その変形と抑圧の過程を繰り返すなかで、「現実」に密着すればするほど「一種の墮落」として否定される「自己」を描いた「自己表象テキスト」として位置づけられる。

4. 結び

本稿は、兪鎮午「新京」を取り上げて、作品全体の解釈よりは「新京」という場が持つ意味を当時のコンテクストのなかで解明していく作業を中心に行った。「新京」の主人公が、「旧い」ものは去って行き、「新しい」ものが到来すると認識した「新京」という空間は、実際には「満洲国」の首都として選定され、都市計画がなされる段階から、中国の勢力の「封じ込め」という戦略があったことを「国都建設計画図」から読み取った。そして、主人公が「東洋が西洋の影響から抜け出て、自分のものを創造しようとする努力のひとつの現われ」として認識する「新京」の建築物は、帝冠様式という形式に内包されていた日本のナショナリズムの台頭を背景に、「西洋」のモダニズム建築に対抗する形で考案された建築様式で建てられたものであり、そのなかには「近代の超克」と「東亜新秩序」のイデオロギーが込められていることを確認した。「新京」という空間は、このような都市計画と建築様式をもって、「大東亜」の具現として、必然的に来るべきアジアの未来像として機能したのである。

兪鎮午が「満洲国」の首都「新京」を題材として書いた小説「新京」には、「新京」という都市空間に作り上げられた「大東亜」の理想と現に存在する「満洲」の様々な矛盾を植民地知識人が洞察し、必然的なものとして提示される新しい未来像を受け入れる姿が描か

れている。しかし、すでに始まっている「新しい秩序」を受け入れるしかない作中の主人公、そして現実の作家は、「現実」に密着すればするほど「一種の墮落」として否定されるというこのテキストの語りの装置に、最初から束縛されているのである。

1 ヶ月後に開かれる「大東亜文学者大会」に朝鮮代表として参加する「新京」の作家兪鎮午は、そうするしかない自分の境遇を自分自身が納得し、しかもかつ自己批判するために、「自己表象テキスト」としての「新京」を書かざるを得なかったであろう。

注

- 1 朝鮮代表は香山光郎（李光洙）、芳村香道（朴英熙）、兪鎮午、寺田瑛、辛島曉
- 2 兪鎮午は「汽車の中」（『国民総力』1940年12月～1941年1月）、「南谷先生」（『国民文学』1942年1月）を「端正な」日本語で書いた。
- 3 金振松『ソウルにダンスホールを——1930年代朝鮮の文化』現実文化研究、1999年、p.120 参照。
- 4 玄鎮健「貧妻」（1921年）、玄鎮健「酒を勧める社会」（1921年）、兪鎮午「五月の求職者」（1929年）、廉想渉「三代」（1931年）、李光洙「土」（1932年）、朴泰遠「小説家仇甫氏の日」（1934年）、蔡萬植「レディーメード人生」（1934年）、林和「再び交差点で」（1935年）、李箱「翼」（1936年）、蔡萬植「痴叔」（1938年）など
- 5 姜萬吉『韓国資本主義の歴史——奪われた野原に立つ』歴史批評社、2000年、p.177
- 6 姜萬吉、前掲書、p.177
- 7 西澤泰彦『図説 「満洲」都市物語』河出書房、1996年、p.106
- 8 西澤泰彦、前掲書、p.107
- 9 西澤泰彦、前掲書、p.114
- 10 西澤泰彦、前掲書、p.107
- 11 越沢明『満州国の首都計画』日本経済評論社、1988年、p.90、西澤泰彦、前掲書、p.107 など。
- 12 「キャバレー——抑々、キャバレーとは、飲み且食らひ、ロシヤ女を抱き締めて踊り狂ひ、下手なレヴキウを見せられて、そしてオタカラを浪費させられるところである——「ハルビン」案内はキャバレーという言葉にかう定義を下してゐる」。永見文太郎『新京案内』新京案内社、1939年、p.124
- 13 「カフェー・インベリアル」は実在した店で、新京駅からほど近い、日本橋通り三笠町（現長春市寛城区黄河路）にあったようである。「平屋作りのバツとしない構へである。夜など前を通つても、カーテンを垂れこめて灯もろく／＼見えないから、これでも商売をしてゐるかと思ふくらゐである」（永見文太郎、前掲書、p.125）と1939年発行の「新京」ガイド・ブックには書かれている。
- 14 永見文太郎、前掲書、巻末付録地図
- 15 彰国社編『建築大辞典』第2版、彰国社、1939年、p.1113
- 16 越沢明、前掲書、p.183
- 17 越沢明、前掲書、p.183
- 18 <<http://blogs.yahoo.co.jp/yosihei8jp/folder/1060536.html>>、最終確認2008年9月9日

- ¹⁹ 西澤泰彦、前掲書、p.112
- ²⁰ <<http://blogs.yahoo.co.jp/yosihei8jp/folder/1060536.html>>、最終確認 2008 年 10 月 20 日
- ²¹ 藤田弘夫『都市の論理』中央公論社、1993 年、p.96
- ²² 尾崎秀実『『東亜共同体』の理念とその成立の客観的基礎』『中央公論』第 54 巻第 1 号、1939 年 1 月
- ²³ 伊東昭雄編『アジアと近代日本 反侵略の思想と運動』社会評論社、1990 年、p.256
- ²⁴ 兪鎮午「所感」『三千里』1940 年 9 月、p.91
- ²⁵ 鄭豪雄「日帝下知識人の内面風景——兪鎮午「新京」」『文学思想』第 24 巻 9 号、文学思想社、1995 年 9 月、p.282
- ²⁶ 日比嘉高『〈自己表象〉の文学史——自分を書く小説の登場』（翰林書房、2002 年）のキーターム。
より詳しい定義は日比の著書、pp.9-12 参照。
- ²⁷ 日比嘉高、前掲書、p.11